

# あなたがゴツホなら

作・広島友好

○登場人物

照林伴介（てるばやしばんすけ）絵描き・七七歳

照林藍子（あいこ）伴介の妻：七八歳

照林美里（みさと）伴介・藍子の娘：四八歳

○時

現代

○所

伴介と藍子の住む家。その居間。

照林伴介と藍子の住む家。その居間。

居間から上手側に入った所に台所。そのとなりに風呂がある。逆に、下手側には玄関。また、居間の奥には、廊下を隔てて、伴介のアトリ工兼書斎がある。伴介は、夜、そこで寝ている。二階には藍子の寝室がある……という想定。

ある日の午後。今、居間には誰もいない……。

と、玄関の郵便ポストに手紙を取りに行っていた伴介が戻ってくる。手に数通の封筒や葉書。その中の一枚の葉書を目にして、ふと足が止まる。

伴介  
(じつと葉書を見つめて) ……。

老犬のシェーンが吠える声がする。 ……。

玄関の戸を開ける音がする。

美里（声） お父さん、おるの？

伴介 おおっ。

娘の美里が居間に入ってくる。

伴介 ああ。

美里 ……何？ なんかあった？

伴介 ……喪中葉書。

美里 誰か……亡くなったの？

伴介 高校んときの……友達……。

美里 前も、確か……？

伴介 あれは絵描きの仲間だよ。フ、次から次と……。

美里 ……大丈夫？

伴介 もう慣れっこだよ。

間。

伴介 時間かかったな。

美里 こんなもんよ。

伴介 ん……だな。

沈黙……

伴介 (恐れを抱きつつも聞かずにはおれずに) ……それで？

美里 ショック受けないでね。

伴介 どうだった……検査？

美里 言うことなんでも聞いてあげて。

間。

伴介 悪かったのか……？

美里 自分から言うって。

伴介 母さんは？

美里 すぐ帰ると思う。買い物してる。気分転換。

伴介　ひとりで大丈夫なのか？

美里　わたし……仕事だから。もう行くね。

伴介　おおっ、もうちょつというよ……

美里　会議の準備があるから。忙しいの。

伴介　母さんが帰って来るまで。

美里　わたしだってッ。わたしだってパニックってんだからッ。

伴介　いいだろ、まだ。

美里　（居間を出ていきながら）お父さんのせいだかんねッ。

伴介　俺のせいって……！

美里（声）　苦勞の蓄積ッ。ストレスがたまってたんだよッお母さん。

美里、玄関を出ていく。玄関の戸が乱暴に開け閉めされる音が響く。

伴介　（唸って）んゝゝ。

沈黙……伴介は思案気に居間の中を行きつ戻りつ歩く。

と、玄関の外でまた老犬のシェーンが親しげに吠える声がする。そして玄関の戸が開く

音がする。

藍子（声は明るい）ただいまー。

伴介 おうっ。

藍子（居間に入ってきて）美里、プリプリしてたけど？

伴介 いつものことだよ。なんかあると、俺に腹立てて。

藍子 アハハ。

藍子は化粧気のない顔に、こぎつぱりとした仕立てのいい服を着ている。ずいぶん着込んでいるが、清潔感があり、風合いがいい。

伴介 ……どうだった？

藍子（買ってきた物をエコバックから取り出して）一度飲んでみたかったのよー、奮発しちゃった。

伴介 何？

藍子 カヤマ珈琲で買っちゃった。

伴介 高いんだろ、あの店？

藍子 (伴介にコーヒー豆の袋を見せて) コピ・ルアク。

伴介 聞いたことないな……。

藍子 教えない。またなんか腐すから。

伴介 なんも言わないよお俺、あんたの趣味に。

藍子 ホントにい!! ゲツとか言わない?

伴介 言わない。

藍子 このコーヒー豆……実は猫のウンチからできてる。

伴介 ゲツ!! 猫のウンチ!!

藍子 幻のコーヒーって言われてんの。飲んでみたかったの。

伴介 そんなの飲むから胃が痛くなる。

藍子 ガンとは関係ないから。かえって予防になる、コーヒーは。

伴介 じゃ、なんでお腹が痛くなるのよ?

藍子 別の理由でしょ。ストレス。人間関係。金銭面の不安。家族のゴタゴタ。未来への不安。

伴介 フフ……。

間。



藍子 (ある決意を込めて) ねえ、お願い……！

伴介 飲めばいいよ、猫のウンチのコーヒー。心配してるだけ。

藍子 言われなくても、飲む。じゃなくて。

伴介 何……？

間。

藍子 描いてほしいの……わたしの顔。

伴介 フ、今さら。

藍子 ヌードになってあげてたでしょッ。

伴介 いったいいつの話してるの……！ あのころは、モデルを雇うお金もなかったから。

藍子 自分の顔ばっか描いて楽しい？

伴介 あのね……ゴッホを見習ってんの。試してんの、絵の可能性を。

藍子 個展に自分の顔をスラッって並べるつもり？ ホラー絵画じゃないんだから。

伴介 自画像ってのは奥が深いんだよ。自分のことがいちばんわかんない。

藍子 妻のことはもつとわかってない。

伴介 あんたはいつもミステリーウーマンです。

藍子 フフ。で、絵はそろった？ まじめな話。

伴介 前んときの絵じゃ……駄目か？

藍子 売れ残った絵じゃどうしようもないでしょ。個展は新作で勝負しなきゃ。

伴介 んん。

藍子 たっかい会場費払ってんだから。

伴介 いつも銀座でやるこたあないよ。どっか適当な所で……

藍子 照林伴介の価値を世に知らしめるためじゃない。

伴介 にしても、二年に一回は多くないか？

藍子 ホントは毎年やりたいぐらい。

伴介 ……。

藍子 いい、個展は絶対やってよ？ いい、約束よ？ わたしが……いなくなっても。

伴介 え……？

藍子 (微笑みを作って) わたし……ステージ4だった……！

伴介 (声にならない声を漏らす) ……！

いつの間にか優しくあつたかい音楽が流れている。  
ふたりの顔に明かりを残しつつ……暗くなる。

タイトルが浮かび上がる。

『あなたがゴッホなら』

2

何日か後の夕方。美里が来ている。美里は、袋から買ってきた食料品や日用品をテーブルに出しながら。伴介は、美里が買ってきた物を手に取って見たりしながら。

美里 少しは料理してるんだ、お父さん？

伴介 チャーハンなら得意だよ。ラーメン屋で二年バイトしてたから。

美里 塩っ気が多くならないように気をつけてねえ。塩分取り過ぎると良くない。

伴介 今さら体の心配しても遅い……

美里 (怒気を含んで) ええッ!!

伴介 て、母さんが言うんだ。うまいもん食べさせろって。

美里 からい物、好きだからなあ、キムチとか、担担麺とか。

伴介 胃に悪いって言うてんのに……。まあ、もう、好きな物食べさせるよ。

美里 薬ちゃんと飲ませてよ。

伴介 よく効くんだらなあ。上でぐったり寝てるよ。副作用かな、あれ。

美里 最近の抗ガン剤、いい薬が出てるみたい。結構副作用少ないらしいよ。

伴介 ちよつとは辛抱しなくちゃだな、入院したくないっつーんだから。

美里 言うだろうと思った、入院嫌だって。

伴介 治るんだったらあれだけど……無理してでもあれさせるけど。

美里 なんでもっと早く気づかなかったかなあ……。

伴介 もともと痩せてるもん。お腹痛いつてのもコーヒーとか、からいものの食べ過ぎかと……。

黒藤先生も……今飲んでるリウマチの薬の副作用だろうって言ってたし。（力なく自嘲して）  
ハハ、かかりつけの医者が見逃すんだから、わかんないよ俺だって……。

美里 お父さん責めてるんじゃないよ。

伴介 ……ん。

美里 ……。

外で人懐っこいシェーンの吠える声がする。

美里 散歩に連れて行って。

伴介 ん。

美里 シェーンも、いい年でしょ？

伴介 俺と同じぐらいかな、人間なら。周りは年寄りばっかだよ。やだやだ年寄りは。

美里 ハハハ。

伴介 ……ホントはな、猫がよかったんだけど。

美里 え?! そんなの初耳。

伴介 母さんが、ほら、猫アレルギーだし。

美里 ああ。

伴介 犬がいいって言い張るし、いつもの調子で。

美里 フフ。

伴介 んじゃ、ちょっと。

伴介はシェーンを散歩に連れていこうと、居間を出ていきかける。その伴介に……

美里 (なるべくさりとて) 言うとして) ここに……!!

伴介 ん？

美里 ここに……戻ってきてもいいけど、わたし。

間。

伴介 ……や、無理せんでも。今の感じがいい距離だ。ちよくちよく来てくれるし。

美里 ……。

伴介 ヤな上司が異動になって、仕事がやりやすくなったって。

美里 それとこれとは……

伴介 生活のリズムもあるだろうし……ん。ありがと。ん。……じゃ。

伴介、居間を出ていく。犬のシェーンのうれし気な吠える声が聞こえる。伴介（声）「（シェーンの首をなでている）よおし、よしよおし……」

散歩に出かけたようだ……

美里 （二つ大きく息をつく）ふうふう……。

二階の部屋から藍子が降りてくる。かなり体力が落ちて、足元が危うい。しかしまだ気力があり、笑顔を見せて。着慣れているが、こぎつぱりとした部屋着姿。

美里 大丈夫う？

藍子 二階はもうきついかな……ハハ。

美里 奥の部屋使えばいいのに。

藍子 お義母さんの部屋だったから。荷物も整理できてないし。

美里 何年経ってんのよ、おばあちゃんが亡くなつて。

藍子 んー、あの部屋にいと、いろいろ思い出しちゃうのよお。

美里 仲良さそうに見えたけど。

藍子 神経戦よ。美里の前では優しいおばあちゃんと、いいお母さん。んでもって、お父さんは知らん顔、アハハ。

藍子は背もたれのある椅子に、笑みを浮かべながらも力を使い果たしたように腰かける。

藍子 どっこいしょ……フフ。

間。

美里 ……お父さんってさ、わたしが絵をやめたの、まだゆるせないのかなあ。

藍子 美里は俺より才能があるってよく言ってた。

美里 絵じゃ食べてけないよお。親子二代で、お母さんに苦勞かけたくない。

藍子 それは困る。ひとりで十分。せっせと稼いだ生涯賃金の半分は、お父さんにつき込んだ。地方の大学の職員なんて、大した給料もらえてなかったしねえ。

美里 投資、大失敗じゃない、ハハ。

藍子 今現在のところは……ね。あしたには、照林伴介の絵が世界で評価されてるかも、アハハ。

美里 わたし……自分を信じきれるほど馬鹿じゃないから。馬鹿みたいに信じきれる才能がなかった……お父さんみたいに。

藍子 違うのよ。途中でやめちゃ、割に合わなかっただけ。今、絵をやめたら、人生を絵につき込んできた、そのコストにつり合わない……なんて、考えてたらあの歳になった。絵をやめて一から何かをやるってのも、もう無理だし、ハハハ。

美里 お母さんがいちばん信じてるくせに……。

間。

藍子 そうだ、今度預かってほしい物があるんだけど。



美里 いいけど。何？

藍子 ん。まだ書けてないから。できたら、渡す。

美里 なんか大事な書類とか？

藍子 死ぬまで見ちゃ駄目だから。

美里 死ぬとか言わないでッ。お願いだから……。

藍子 はいはい。ありがと。フフ……。

間。

藍子 あんた……いい人いないの？

美里 何、急に？

藍子 安心してあの世に行きたい。

美里 だからあ（死ぬみたいなこと言わないで）。

藍子 はいはい。

美里 ……結婚しても、地獄が待ってるかもよお。

藍子 けど、さみしくはない。

美里 ん……それは……そうかもね。でも、お父さんもおるし。

藍子 お父さんだって、いつかは。

美里 ん……。あ、個展って、ホントにやるの？ もうすぐでしょ？

藍子 やるやる。美里が受付やってあげて。

美里 ヤダよ。休めないよ、一週間も。

藍子 困るほど、お客来ないか。アハハ。

美里 駄目じゃんそれ、アハハ。

間。

藍子 ああつ、そうだ！

美里 今度は何？

藍子 美里、動画って編集できる？ スマホ。

美里 動画……て、何すんの？ うちの職場で動画たまに作ったりするけど。

藍子 教えて。ウフフ。

美里 (笑顔を誘われて) 何、何!!

優しくあったかい音楽が流れてくる……

（以下スムーズに場面転換する）藍子は『エーデルワイス』を鼻唄で歌いながら、こぎつぱりとした、風合いのいいショールを羽織り、スマホで動画を撮る準備をする…美里はいつの間にか去り…代わりに伴介が居間に入ってきて、絵を描く支度を整える……

3

居間の、背もたれのある椅子に藍子が座っている。椅子の背にはクッション代わりに暖色の毛布が掛けられている。体が弱っているのが見た目にも感じられるが、化粧つきの顔にはさつぱりとした微笑が浮かんでいる。

その藍子の姿を伴介が絵に描いている。伴介に向けてスマホが据え付けられ、絵を描く様子をビデオ撮影している。そのスマホが気になるのか、伴介の筆は進んでいない。

藍子 ……ちよつとごめんねえ。こっちのほうが……（手を伸ばして、スマホの位置や角度を調節する）

伴介 いいって。撮らなくて。

藍子 （伴介の）顔が陰になるから。

伴介 調子出ないよ。

藍子 ごめんねえ、こっちの椅子のほうが楽なんだから。アトリエじゃないと、思うような陰影が出ないんでしょうけど。

伴介 違うよ、そんなんじゃない。

藍子 モデルが若くないと、筆が乗らない？ アハハ。

伴介 気が散るんだよ。こんなの撮っても無駄でしょ。意味ないよ。

藍子 作家に興味持ってもらわなくちゃ、再生回数伸びない。

伴介 そんなことしなくっても……

藍子 何がバズるかかわらないでしょ。

伴介 バ、バズるって……!!

藍子 美里が動画の編集をしてくれるって言うし。ユーチューブ始めるのよ。照林伴介の絵画チャンネル。目標、登録者数一万人。再生回数十萬回。

伴介 ……いい絵ってのは、必ず認められるんだよ。そんなことしなくっても。

藍子 またゴッホ？

伴介 そうじゃないけど……

藍子 ゴッホは三十七歳。照林伴介はもう七十七歳。死んでから売れるならまだいいけど……。

伴介 ……。

間……伴介はまた藍子の絵を描き出す。

藍子 個展は絶対やってね。わたしが……いなくても。

伴介 またおどす。

藍子 約束して。会場費も振り込んであるんだから。

伴介 ……もうやらなくていいんじゃないか。俺の絵は駄目だった。世間は認めてくれなかった。頼みの綱の絵画教室までクビになるし……

藍子 あれは……世代交代で、若い人を先生に雇っただけ。後進に道を譲る、よ。

伴介 美術館に絵の一枚も買ってもらえなかった。

藍子 コネよ、コネ、美術館に絵を買ってもらえるなんて。愛想を振りまいて、媚び売ったのよきつと。一流の画家のやることじゃない。

伴介 世間は俺を忘れてるよ。

藍子 (スマホを手に取り伴介を撮影しながら) わたしが評価してきた。照林伴介の絵を。誰よりも。

伴介 撮るなって。病気だから怒らせないようにしてるけど……。恥ずかしいよ。

藍子 わたしは平気。もうこの世にいないから。

伴介 俺だってすぐ追いつくよ。ゴッホはテオが亡くなって、すぐ死ぬんだから。あれ……、逆か？

藍子 わたしがテオで、あなたがゴツホなら、死んでから売れる……この動画で。んで、儲かるのは……美里か。あんにやろめ、ウフフ。

伴介 いっつもポジティブだな、あんたは、フフ。

藍子 (なんとか立ち上がるが、フラフラッとする) ……そうでもない。

伴介 どうした?!

藍子 吐きそう……!

伴介 え?!

藍子 ウップッ!

伴介 わわッ……!

伴介は藍子の体を支えてトイレに連れていく。伴介(声)「大丈夫?」 藍子(声)「話し  
かけないで……」 ……

伴介が一人居間に戻ってくる。藍子を描いた描きかけの絵を見つめる。ふと、藍子のスマホを取り上げる。アプリを操作して動画を再生する。再生された動画の音声聞こえてくる。その音声が流れる中、ゆっくりと暗くなる……

(再生音声)

藍子 またゴッホ？

伴介 そうじゃないけど……

藍子 ゴッホは三十七歳。照林伴介はもう七十七歳。死んでから売れるならまだいいけど……。

伴介 ………。

間……

藍子 個展は絶対やってね。わたしが……いなくても。

伴介 またおどす。

藍子 約束して。会場費も振り込んであるんだから。

伴介 ……もうやらなくてもいいんじゃないか。俺の絵は駄目だった。世間は認めてくれなかった。

頼みの綱の…… (再生音声が消えていく)

……………

何日か後の午後遅く。美里が藍子に付き添い、病院から帰ってきたところ。藍子はさらに弱っている。美里は気遣いしつつ藍子を背もたれのある椅子に座らせる。

美里　なんか冷たいもん、飲もうか。(台所へ)

藍子　行って帰るだけで死にそう、ハハ。

美里(声)　待たせるからねえ、病院。

藍子　(疲れて息を吐く)ふうう……。

美里(声)　ビールやめたんだ、お父さん？

藍子　わたしが死ぬまで飲まないって。

美里(声)　え？

藍子　違う。わたしが良くなるまでって、言ってたか。

美里　(居間に戻ってくる。手に持ったお茶のペットボトルの蓋を開けて、藍子に手渡す) お父さん？ シエーンの散歩？

藍子　高校時代のお友達のおうち。喪中の葉書が来てたでしょ？

美里　ああ……。



藍子 お父さん、頼むわね。周りは死んでばっかだから。

美里 ……この前も戻ってこようかって、言ったんだけど。

藍子 で？

美里 今の距離がいいって。

藍子 そう……。 (お茶を一口やっとな飲んで) ああ、美味しいッ。

間。

藍子 ……ホントにいい人いないの？

美里 この年になったら、駄目よ。面倒くさい。

藍子 あの人は？ いっだったか、家に一度連れてきてくれた……。あごが四角の。感じのいい人だったのに。お父さんも珍しく気に入ってた。

美里 フフ……。あの人結局、離婚できなかった。

藍子 えっ?! 騙されてたの？

美里 結果的には……。かな。奥さんに子どもができちゃって。

藍子 あらゝ。

美里 こんなんばかり……。男運がない。

藍子 んなこともないだろうけど……。

美里 じゃ、職場に戻るね。

藍子 逃げたな。ハハハ。

美里 夜は飲み会。サッチーと。

藍子 サッチャンでもいいのよ、母さんは。ひとりでさみしく暮らすよりは。

美里 ハハ、考えとく。

藍子 ホントに。

美里 サッチーにも聞いてみなくちゃ。あっちにも好みがあるだろうし、フフ。

藍子 飲み過ぎないようにね。

美里 あったかくしてねー。

美里、家を出ていく。藍子は椅子に体を預けたまま、見送る。日が傾いてくる。藍子、ふと『エーデルワイス』を口ずさみ歌う。

藍子 ら〜ららら〜 ら〜ららら〜 ら〜ら ららら ら〜ら……（と深く息を吐く……末期の息のように）ふうふうう……

藍子、椅子に体を沈めて死んだように動かなくなる。夕闇が濃くなる……

伴介が帰ってくる。外出用のジャケット姿で。なんだかひどくくたびれている。

伴介 ただいまー。

藍子 ………。

伴介 ああつ、くたびれたくたびれた……。

藍子 ………。

伴介 (椅子にもたれて、だらしなく横になっている藍子に気づく) ん？

伴介はジャケットを脱いで、藍子の体にかけてやろうとする。と、不安がきざして。

伴介 藍子……？ 藍子。藍子ッ。(体を揺すったり、頬を軽く叩いたりする) おいッ。おいッ。藍

ちゃんッ。藍ちゃんッ……！

藍子 ………。

伴介 (鼻と口の前に手をかざして……) ああ……ッ！ (両手を合わせて。口の中で) ナンマン

ダ……ナンマンダ……

藍子 ………フフ。

伴介 (絶望して) アアッ藍ちゃんツ……！

藍子 フフフ。

伴介 (気づいて) ……ん?! ええっ……！

藍子 アハハ……！

伴介 息してなかったよお……！

藍子 フフツ、息止めてた……アハハ。

伴介 こっちの心臓が止まるよお。からかうなよお。

藍子 ごめん、ごめん。

伴介 フフツ……アハハツ。

藍子 ウフフ……アハハツ…… (笑ってて) お腹痛い。

微笑み合う。

藍子 藍ちゃんって、久しぶりに聞いたなあ。

伴介 えっ……フフ。

藍子 昔はあなた、藍ちゃんって。

伴介 あんただって、伴ちゃんって。

藍子 フフ。

伴介 ハハ。

藍子 ……どうだった？

伴介 あんたの演技力には……こっちが死ぬかと。

藍子 うん。お友達。

伴介 ああ……線香あげさせてもらった。

藍子 。

伴介 ……息子が、美里ぐらいのと、その下にもいて。二人とも一流企業に勤めてるらしい。

藍子 親のコネ？

伴介 まさか。ま、あいつもいいとこ勤めてたからなあ。

藍子 そうね。

間。

伴介 ……おかしいこと言うんだ、奥さんが。

藍子 ？

伴介 主人は生前、あなたにだけは……ほかの誰にも、どんなに頭を下げられても一円だって貸さ

ないけど、照林さんだけには、何かあったら、僕はお金を貸してやるんだ、って、よく言うてました……って。

藍子 どういう意味？

伴介 だから、あいつにとって俺は、それだけ大切な親友だったってことなんだろう……。

藍子 ふうん……。

伴介 でも俺、言っただけなの。奥さん、俺はね、逆に、どんなに苦しくても、あいつだけからは、お金は借りませんよって。だってそうでしょ、親友じゃなくなっちゃうから。絵が売れなかったって、食いつめて路頭に迷ったって、んなこと、絶対にしませんよって。

藍子 フフ……奥さんに言っても。

伴介 なんか、俺のこと、下に見てたんだなあって。俺があいつから、金借りるわけないじゃんよッ。

藍子 (なだめて) まあ、まあ……。

間。

伴介 にしても、元気だったなあ奥さん。

藍子 フフ……。

伴介 三ヶ月も経ってないのに。孫が……七人いて、パワーもらってんだってよ。さみしく感じる暇がないってさ。

藍子 孫かあ……フフ。もう一人ぐらい、子ども産んどくんだったかな。……美里が怒るか。

伴介 (たわむれて) 今から頑張るか。

藍子 馬鹿。スケベジジイが。ハハ、こそばゆい。

伴介は藍子に優しくキスをする……。

藍子 ……もういよいよ駄目だってわかったら、飲むのも、食べるのもやめて、体の中空っぽにして、きれいに死にたい。下(しも)の世話されるなんて、絶対いや。わかった？

伴介 わかった。

藍子 ホントよ。

伴介 誓うよ。

藍子 ……汗くさい。風呂入ってきたら。

伴介 もう一回、チューしてええか。

藍子 フフ、聞く馬鹿があるか。

ゆっくりと暗くなる……同時に優しくあたたかい音楽が流れる。

5

前の場合から少しあと。夜になっている。藍子は一人で風呂に入っている。伴介が居間から風呂場に向かって声をかけている。

伴介 それ、あれだ……あれ、んーと、なんだっけ……草津の湯！ ババンバ、バンバンバン、ハ

ービバンノンン。ババンバ、バンバンバン。ええ香りじゃろ？

藍子（声） あったまるー。

伴介 ひとりで大丈夫？ 背中流そうか？

藍子（声） まだ見たいか、わたしのヌード？

伴介 見たいよーいっだって。若いころはいいスタイルしてたよなあ。

藍子（声） もう胸ないわよ。

伴介 あんたのお陰で大賞をいただいたなあ。

藍子（声） モデルのお陰ね、ハハ。

伴介 勢いがあつたなあ、あのころは。



藍子（声）　（『エーデルワイス』の鼻唄を歌う。か弱いが、リラックスして気持ち良さげ）ら〜ら

ら〜ら　ら〜らら〜ら　ら〜ら　ら〜ら　ら〜ら……

伴介　（馴染みの鼻唄を聞いて）フフフ。

伴介のスマホから電話の呼び出し音が鳴る。伴介、電話に出る。

伴介　ん。ああ。今、風呂。ん。ん。ひとりで入る気力あるよ。鼻唄歌ってる、例の、得意の。ん。ん。気をつけて、声かけるようにしてる。足が伸ばせるから、湯船につかりたいんだってさ。ああ、感謝してるよ、手すり付けてもらって。あれなかったら、ひとりじゃ無理だろ。……ん。ん。まあまあだな。準備はほぼほぼ終わってるよ。宅配便に来てもらって、ギャラリーに送ってある。あとは……母さんの絵の仕上げだな。……母さんが絶対やれって言うんだもの。父さんだって、一週間も家を空けるのはどうかと思うけど……

藍子の鼻唄が聞こえなくなっている……「ボツチャン……ッ！」と水の中に何かが沈む音が不安げに響く……

伴介　……ああ、頼むよ。ちよくちよく顔出してもらえれば。ん、日中は寝てるから大丈夫だろ。

ん。ん。……え？ ああ……ま、今のままでいいよ、父さんの元気なうちは。美里には美里の生活があるんだから。仕事もさ。ん……ん……。ああ、ありがとう。ん。わかった、母さん喜ぶわ。ありがとう。じゃ、切るよ。

伴介は電話を切って、スマホを置く。風呂場の藍子に向かって声をかける。

伴介 美里から電話あったよ。今度、梨持ってくるってよ。サッチちゃんと梨狩りに行ったんだってさ。……？

風呂場からはなんの返事もない。

伴介 聞ってる、藍子？ ……藍子？ またおどかさうったって無駄だよ、フフ。

沈黙……

伴介 ……おおっ！

伴介は異変を感じ、居間を出て風呂場に入る。舞台に伴介の悲痛な声だけが響く。

伴介（声）　おーいつ、どうした?!!　藍子……ッ?!!　ああッ……なんでッ!　藍子!　息しろッ!  
藍子!　藍子ッ!　あああゝゝッなんで、なんでッ!　藍ちゃん……!　藍ちゃんッ!　藍  
ちゃん!……

……………

6

真夜中の居間。その空間はいつもより陰が濃く、現実的な雰囲気ではない。伴介はキャ  
ンバスに向かい藍子の絵を仕上げている。しかし、伴介の正面には誰もいない……。  
すると、伴介の背後から藍子が浮かび上がるようにひょっこりと現れる。伴介は前を見  
たままである。心の中に現れている藍子と言葉を交わす。

藍子　（伴介の描く絵を後ろから覗いている）個展をやるのは、約束よ。  
伴介　だから描いてるだろ……。

伴介は藍子の絵を描き、藍子はそれを後ろから見守っている。

伴介 ……なあ。

藍子 ん？

伴介 届出しないとまずいんじゃない？ 医者に知らせなきゃ。

藍子 わたしがいいって言ってるんだから。個展の準備に夢中で気づかなかったって、言えば？

伴介 でもなあ……

藍子 キャンセルしたら、信用がなくなる。会場費も、チラシや案内状も無駄になるし。またやるって言っても、会場押さえるのも大変。

伴介 んん……

藍子 そもそもあなた生きてる？ 気力わく、個展やる？ わたしいなくて？

伴介 せめて美里には……

藍子 ——！

伴介 心配するだろうし。

藍子 ……あの子、取り乱して、個展どころじゃなくなるきつと。反対する。

伴介 そりゃそうだろ。俺だって受け止めらんないよ。覚悟はしてたけど。

藍子 わたしもよ。まさかねえ。お風呂で溺れるとは、ハハ。

伴介 笑いごとじゃ……

藍子 あれよ、死亡届を出さなくて死体遺棄で警察に捕まっても、あれよ、執行猶予がつくわよ。  
初犯だし。

伴介 俺を前科者にしたいのかよ!!

藍子 んんゝでできればそれは避けたいかも……ハハ。

間。

伴介 なんで、そんなに個展にこだわるんだ？

藍子 そりゃ、名の残る画家になってほしいから……かな？

伴介 このままじゃ、裁判所に名前が残るよ。

藍子 あれよ、初めて伴ちゃんの絵を見たときの感動が、あれなのよ、忘れられないの。

伴介 ああ……いといギャラリーの？

藍子 個展なんて招待されるの初めてだったから、緊張して行っただけど……あゝッよかったなあ。照林伴介の小宇宙がギャラリーの空間いっぱいに広がって。これって日本のゴッホじゃない？ ゴッホよりすごいんじゃないって。感動したなあッ。

伴介 全然売れなかったけど……評価もさっぱり。

藍子 (冗談めかして) 見る目がない、どいつもこいつもッ。

伴介 ハハハ。あんただけだな、俺の味方は。

藍子 わたしはテオですから。照林伴介のテオ。

伴介 フフ……。

間……絵に最後のひと筆を入れる。

伴介 ……どうだ、これで。

藍子 ん。ん。いい感じ。モデルのお陰だ。

伴介 ハハハ。

藍子 今回の個展の目玉だ。

伴介 自分でほめ過ぎ。

藍子 (伴介の頭を後ろからそつとなでて) ありがと……伴ちゃん。

伴介 (こらえきれずに涙が落ちる) ううッ。……つうッ……！

藍子 伴ちゃん……！

ゆっくりと暗くなる……

7

前の場の次の日。その朝早く。伴介の個展の初日当日である。伴介は悄然と個展会場に出かける準備をしている。他所行きのジャケット姿。できたばかりの藍子の絵を絵画用の鞆にしまおうとしているところ。そばにキャリーバック。居間のテーブルには飲みかけのマグカップが置かれている。

そこに、美里が慌ただしくやってくる。

伴介 (気づいて) おうっ。

美里 (必死の面持ちで) お母さんは？

伴介 ん……

美里 お母さんはッ？

伴介 や……その……。おおっ飲むかコーヒー、猫のウンチの。うまいぞおこれ。

美里 LINEの返事がない。既読になんない。朝、必ず連絡くれてるのに。お父さんも電話に出ないしッ。

伴介 あれだ……浪江叔母さんのところに行ってる……きのうから。家にひとりじゃ、さみしいって。

美里 え、でも。きのうの夜、お風呂入ってるって言ったじゃない？

伴介 だから……あれから。タクシーで。

美里 でも。

美里、玄関に駆けていく。すぐに戻ってきて。

美里 お母さんの靴、あるじゃないッ。杖も。

伴介 だから……もう歩けなくて……かついでタクシーに……

美里 うそッ。お母さんッ。お母さん！

美里は母を呼びながら、二階の藍子の部屋へ駆け上がる。

伴介 （観念して一つ大きく息をつく）ふうううつ……！

二階から美里の悲痛な声が響く……



美里（声） お母さんッ！ お母さんッ。ねえ、ねえッ！ 起きて。起きてよッ。お母さん……ッ！  
伴介 ……！

美里が涙を流し、困惑し、怒り悲しみ、憤りで足を踏み鳴らしながら居間に戻ってくる。

伴介 ああッ……ごめん。

美里 冷たいよッ、お母さん。

沈黙。

伴介 ごめん。悪かった。

美里 いつッ？ いつッ？ なんでわたしに連絡しないのッ？！

伴介 ……。

美里 お医者に来てもらわなきゃでしょッ……！

伴介 ん……。

美里 いつ？ いつ！

伴介 きのう……美里の電話のあと……風呂でおぼれて……

美里 おぼれたの?! お母さん、お風呂で死んだの?!

伴介 ああ。

美里 なんですぐ救急車呼ばないのッ?!

伴介 きれいにしてやろうと思ったんだよッ。裸なんて、見られるの、嫌がるだろ母さん。

美里 助かったかもしれないのにッ……!

間。

伴介 お漏らししてたんだよッ。

美里 え……?!

伴介 そんなの見られるの、嫌がるだろ……。

美里 でも……!

伴介 いさぎよく死にたい……死ぬとわかったら、食べるのも飲むのもやめて、下の世話の迷惑もかけずに、きれいに死にたいって、いつつも言ってたんだからッ。

美里 ……!

伴介 体をきれいに洗って、二階までかついで、着替えさせて、風呂をなんとか掃除したら、疲れ果ててさ……気力が抜けて、うとうとして。お前に連絡しなきゃって思ったけど、もう真夜

中になってて……ああっそうだ、母さんの絵を仕上げなくちゃって。母さんと約束したんだから。母さんが……届出はいいから、個展は必ず開いてよって

美里 それって、死亡届を出さないのって、犯罪だよ。

伴介 出すよ……個展が終わったら。

美里 だからッ。

伴介 絶対個展やれってのが、母さんの望み……遺言なんだから。

美里 ……！

伴介 それに、かかりつけ医の黒藤先生なら、二、三日ズラしても死亡届書いてくれるよ。

美里 んなわけあるわけじゃないじゃないッ。

伴介 あいつがッ——、藍子のガンを見逃したんだ。そのぐらいしたって、バチ当たらないよッ。

美里 もうツめちやくちや。

伴介 （自棄になって）あさってには藍子の厚生年金も入るし。

美里 お父さんッ。

伴介 この天気なら、腐らないだろ、母さんも。

美里 いい加減にしてッ。

伴介 ……！

美里、スマホを取り出して、電話をかけようとする。

伴介 おい？

美里 取りあえず黒藤内科に電話する。

伴介 個展開けないだろ？

美里 行けばいいでしょ。わたしがお母さんを見てるからッ。

間。

美里 (電話が通じて) すみません、黒藤内科ですか？

伴介 ……あつ。

美里 (伴介に) 何？

伴介 (二階へ行こうとする) ちょっと。

美里 お父さんッ？

伴介 母さんの所へ……藍子の所へッ。

美里 何ッ……!! ヤダ。早まんでよッ。わたし一人にする気？ お父さんッ。お父さん……ッ！

伴介、居間に戻ってきて。

伴介 リップクリームぬってやろうと思ってさ。化粧、嫌いだからなあ母さん……せめて。

優しくあつたかい音楽が流れてきて……

美里 (混乱して何がなんだか泣けてくる) うわあああつあんツ……! …… (電話から相手方の声がして、他所行きの声に急に繕って) あっ、すみません、黒藤先生ですか? 照林と申します。はい、照林藍子の娘です……あの母が……母がッ……

伴介、居間の戸口で美里の様子を見守って、一つ、二つうなずくと、二階の藍子の部屋へ上がっていく。

音楽が高鳴って……ゆっくりと暗くなる。

暗闇の中、お経と木魚の音がしばらくあって……鈴（りん）がチーンツと鳴る。と同時に明かりが入る。

そこは葬儀場。藍子のお葬式。喪服姿の伴介が参列者に（客席の観客を参列者に見立てて）喪主の挨拶をしている。そばに喪服の美里が付き添うように立っている。美里の手には涙をふくハンカチ。祭壇には、伴介が描いた藍子の絵が遺影代わりに飾られている。

伴介 ……この絵は、家内の藍子が初めて自分から描いてくれとせがんだ絵でして。出来はどうでしょう……んんんまだまだですが……藍子の人となりはよく出てるんじゃないかと……んん（自分の描いた絵の出来を子細に観察してしまう）

美里 （小声でいさめて）お父さん。（列席者に）すみません。

伴介 （列席者のことを一瞬忘れていたことを思い出して）ああッ。

美里、用意していた手紙を伴介に。

美里 お父さん。

伴介 ん？

美里 お母さんの手紙。

伴介 手紙？ 藍子の？

美里 自分のお葬式でみなさんに読んでほしいって……どうせお父さん、ろくな挨拶ができないだろうからって。

伴介 んん？！

美里 この日のためにつて、手紙を残してたのお母さん。預かってたの。

伴介 そうか……藍子が……！

美里 (列席者に) すみません。

伴介 (列席者に) 藍子が……きょうのために、手紙を書いてたそうで。読んでもよろしいでしょうか。……はい。(手紙を開いて)「本日は、お足元の悪い中……かどうかわかりませんが(笑)……また、お忙しい中、わたしの葬儀のためにお集まりいただき誠にありがとうございます。生前はわがままなわたしにお付き合いただき、ありがとうございました。感謝しております。わたしは自分の「好き」を押し通して生きてこれて、幸せな一生だったと思います。これもひとえに皆様のお陰です。ただ、心配なのは、遺された夫の伴介のことです」。いいんだよ……俺のことは。

美里 (小声でいさめて) お父さん、読んで。

伴介 ……ん。「ごだわりが強くて偏屈で、いまだ絵の道をきわめておりません」……なんだこりや？

美里 (いさめて) お父さん。

伴介 (しぶしぶ読み続ける) ……「本日会場に、娘の美里に頼んで、夫照林伴介の絵を飾ってあるはずです。どうぞご覧いただき、余裕のあります方はご購入いただけますと、葬儀代の足しに……」(思わず泣く) ううっ……！

美里 そこ、泣くところ?! (しっかりして) お父さん！

伴介 す、すまん。……「夫は、妻が先に亡くなると、すぐにあとを追うと申しますが、そのようなことにならないように、皆様に見守っていただけますと幸いです。今しばらくは天国で一人の時間を楽しみたい……」

美里 (思わず吹き出して) プツ。

伴介 (美里をじろつと見る) んん!!

美里 ごめん。続けて。

伴介 「……ぜひ皆様のご支援で、照林伴介に良い仕事を……残せるように導いてやってくださいませ。それが……わたしの切なる願い……」(感極まって涙があふれ、読み続けることができなくなる)

美里 (涙涙で) お父さん……！

伴介 うううううッ……藍ちゃん……ッ! ……



絵の中の藍子の笑顔を残しつつ……暗転。

9

暗闇の中、お経と木魚の音がしばらくあつて……鈴（りん）がチーンツと鳴る。と同時に明かりが入る。

そこはまたまた葬儀場。伴介のお葬式。喪服姿の美里が参列者に（客席の観客を参列者に見立てて）喪主の挨拶をしている。手に涙をふくハンカチ。祭壇には、伴介が描いた遺影代わりの自画像と、そのとなりに伴介が描いた藍子の絵が二つ並べて飾られている。

美里 本日は……涙雨でしょうか……お足元の悪い中、父照林伴介の葬儀にご参列いただき、誠にありがとうございます。母藍子の葬儀でお集まりいただきましてから、わずか半年でこのように……まだしばらくはこの世で絵を描いてほしい、大業を成し遂げてほしいという母の遺言も聞かずに……。長年飼っていた愛犬のシェーンが、老衰で亡くなったのもこたえたようです……。（祭壇の藍子の遺影を示して）この母の絵は、父が生前、最期に描いたものです。普通のお葬式ではありえないことですが、自分の遺影は、母の絵のとなりに自分の自画像を

並べてくれと……自分がきょうまで生きて絵を描いてこれたのは、藍ちゃんのお陰だと……  
（微笑みつつ）お母さんが喜んでるかどうかはわかりませんが、フフ。（祭壇の伴介の自画像に呼びかけながら）……お父さん、わたしもたまには絵を描いてみるね。もううるさく言われないから、のびのび自分の好きな田舎の風景とか。ん……自分の顔も描いてみる。わたしも自分のお葬式には、二人の絵のとなりに、わたしの自画像を並べるね。問題は……誰がわたしのお葬式をやってくれるかだけど、フフ。（参列者に冗談めかして）誰か、この中でいい人いませんか、こんなわたしで良かったら？ ウフフ。（小声で）わたしよりご年配の方が多いんですけど（笑）……冗談はさておきまして……本日は本当にありがとうございました。ロビーに父の絵を飾っておりますので、ごゆっくりご覧いただき、父を偲（しの）んでいただければ、娘として、これ以上の喜びはありません……その上、お買い上げいただければ、葬儀代の足しに……（冗談で泣き真似）ううっ、この前の父の個展が大赤字で……（笑）。ウフフ。本当に本当に、ありがとうございました……！

美里は列席者に一礼して、祭壇を振り向き、伴介と藍子の絵に微笑みを送る。

美里　お父さん……お母さん……ありがと……さみしいよおッ。

美里の笑顔の涙の様子を見せながら……ゆっくりと暗くなる。  
優しくあったかい音楽とともに……

—幕—